

中京大学図書館蔵『ひめゆり 下』に関する一考察

長 友 秀 暁

はじめに

『ひめゆり』は、いわゆる御伽草子の中でも、とりわけ異類物に分類される。また、先学の研究により数種の異本が紹介されており、その伝本系統や成立過程についても、既に論じられている。

今回とりあげる、中京大学図書館蔵『ひめゆり 下』は、拙稿（『中京大学図書館蔵『ひめゆり 下』略解題・翻刻』中京国文学第二十六号 二〇〇七年三月）で紹介しているが、これまでの本文系統とは異なる部分を多く持つ本である。

本稿では、中京本をもとに、本文詞章とその内容等を、『ひめゆり』諸本間で比較、検討を行い、その中で、『ひめゆり』という作品の性格を明らかにする。そこから、本作品に留まることなく、幅広く他の作品も視野に捉え、それぞれの作品に関係性を結びたい。そして、同時期に作られた一連の作品群の特徴を明らかにする、そ

の一端となるよう考察を試みるものである。

一、『ひめゆり』について

中京大学図書館蔵『ひめゆり 下』は、一般に横本と呼ばれる体裁の絵入り写本である。やや厚手の間似合紙の料紙を用い、全二十丁からできている。その中には挿絵が五図描かれる。刊記はなく、作製時期は不明である。また、一丁表右下には、「小川寿一蔵書」の印をはじめ、さらに判別不明の二つの蔵書印が押されている。

『ひめゆり』の伝本は、慶應義塾図書館蔵本（以下、慶應本）や蓬左文庫蔵本の系統と、赤木文庫旧蔵本（以下、赤木本）や彰考館蔵本の系統と、大きく二つの系統に分けられている。

まず、『ひめゆり』のあらすじを確認していきたい。

ある日、ひめゆりは牡丹局と共に経を聴聞するため御堂へ行く。そこで居合わせた黄菊少将に見初められる。少将は秋風という童を

使いにしてひめゆりの元へ文を送る。それに対して最初は少将の思
いを受け入れようともしなかったひめゆりであったが、牡丹局によ
る故事を用いた説得の結果、ようやくひめゆりは少将の思いを受け
入れ、二人は契りを結ぶことになる。その頃ひめゆりのうわさを耳
にした草の大王は、ひめゆりを強引に弘徽殿へ連れてくる。しかし
少将との仲を引き離されたひめゆりは、決して草の大王に靡こうと
はしない。自分に靡かないひめゆりに、草の大王は不審に思ってい
たが、真相を知るや、ひめゆりに対して故事を用いながら、ひめゆ
りを許す。そしてひめゆりと少将はようやく結ばれることになる。
という、ひめゆりと黄菊少将との恋愛譚になっている。また、登場
人物の名からわかるとおり、いわゆる草花を用いた異類物にわけら
れる。

この作品に関して、先学の研究では、本文の比較からその系統を
整理するものからはじまり、源氏物語をはじめとする王朝物語の受
容を論ずるもの、また和歌の引用を論ずるもの等があるが、他の御
伽草子に比べ、十分に論じられているとは言い難い。

そこで、本書の性格を探る上で慶應本^①と赤木本^②をとりあげ、比較
検討を行っていくことにする。なお、中京本は、諸本から推測する
に、おそらく上下二巻のうちの下巻であろうと思われる。

二、登場人物の名前

ここでは、諸本間における登場人物についてみていきたい。注目
したいのは、人物の名前である。

中京本	慶應本	赤木本
さても少将は、 この事ゆめにも しらせ給はず、 御ふみあそはし て、あきかせに たまはりければ、 ひめゆりの御か たにまいり、ほ たんをたつねけ れば、をきのほ、 これをみて、な みたをなかし、	さても、せうし やうは、このよ し、夢にも知せ 給はず、御文か き給ひ、こはき に給りければ、 ほたんをたつね 奉りければ すゝき、これを みて、なみたを なかし	さて又、少将は、 此事夢にも、しら せ給はず、御文あ そはして、秋風に、 つかはし給ひけれ は、ひめゆりの御 かたに参りつゝ、 ほたんを、たつね ければ おきの、是をみて、 なみたをなかし、

右図は中京本を中心に、各系統と比較したものである。この中で、
二種類の傍線を付した部分をそれぞれみていきたい。中京本は、少
将から託された文を「あきかせ(秋風)」から「をきのほ(萩の葉)」
へ渡す。右図から、中京本と赤木本には若干の違いはあるものの、
共通する部分が多くみられる。それに比べ慶應本は、「こはき(小
萩)」から「すゝき」というように、慶應本のみ登場人物の名前に
特徴がみられる。この違いは何を意味しているのであろうか。この
ことに関して江濱氏^③は、

「こはき」には「小萩」の字をあてるものと思われ、「萩」と
「秋」の字形がよく似ていることから、文が伝わる過程で漢字

の誤写が生じ、それに伴って名前が変化したのではないかと考えられる。

また、「小萩」は幼児にたとえて使われる言葉でもあることから、彰考館本・赤木本の「あき風」よりも、慶應本・蓬左本の「こはき」のほうが、内容に合った名前であると思われる。そして、内容上の観点も含めて赤木本の誤写を指摘する。確かに赤木本が誤写した可能性はあったかもしれない。赤木本には、慶應本と比べると、誤脱ともとれる本文の省略がしばしばみられる。しかし、このような本文の異同をもって、本文の良し悪しを判断するのは尚早であろう。けれどもこの異同に関する指摘は、とても興味深い。

このことを考えるためには、その他の登場人物の名前についても検討をおこなっていく必要がある。そこで作中における名前の意味について捉えなおしてみたい。

いうまでもなく、ひめゆりという名は、植物の姫百合が元になっている。ではなぜ主人公の名前に姫百合という植物の名を用いたのだろうか。『和歌植物表現辞典』⁴によると、「ひめゆり」は「ゆり」とは区別して用いられるとし、万葉集の伴坂上郎女の歌、

夏の野の茂みに咲ける姫百合の知らぬ恋は苦しきものぞ⁵

をとりあげ、「夏草の深くおい茂った中にひっそりと人知れず咲く可憐な小さな花のイメージは、片思いのせつなさを訴える心情にみごと調和している」⁴ものとして、姫百合は「忍ぶ恋」とのかかわりでうたわれることが多いと説明する。和歌でのイメージや、和歌的な発想が、この場合『ひめゆり』の主人公ひめゆりの人物像と重なっ

ているのは、偶然とは言えないだろう。

そこで、和歌的な発想を登場人物の命名に用いる方法を当てはめていくと、先にあげた諸本間における名前の違いに対して、違った一面が見えてくる。慶應本の「こはき」「すゝき」は、『徒然草』⁶をあげるまでもなく、それぞれ秋の七草に数えられる秋を表す草花である。特に「すゝき」に関しては、その姿や様子から、和歌では人を招きよせる女人のイメージをもつとされる。このことも人物のイメージと矛盾しない。さらに「こはき」という名も和歌はもちろん、源氏物語で桐壺帝が「宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩が本を思ひこそやれ」⁷と、「小萩」を光君に重ねて詠んだというエピソードが背景にあるのではないか。

それでは、これまで誤写とされてきた赤木本、そして中京本の名前についてはどうだろうか。先にあげた辞典によると、「あきかせ(秋風)」「をきのは(おきの)」は、拾遺集の紀貫之の歌、

萩の葉のそよ音こそ秋風の人に知らるるはじめなりけれ⁸

のように、「おおむね風にそよぐ萩の葉音によって秋の到来に気づくといった趣向のものがほとんどをしめ」⁴ている。和歌の発想である「萩に吹く風＝秋」という類型⁴から、赤木本・中京本の名を捉えなおすと、慶應本とは異なるが、発想の方法は同じである。その結果、諸本すべての名が秋を導く名前として、これまでの矛盾がなくなる。つまりそれぞれが、誤写とは言い切れない、意図的なものであった可能性が明らかになってくる。

また、諸本に共通する「黄菊少将」の名にある「菊」⁹も、もちろん「秋」というイメージを持っている。

『ひめゆり』という作品は、登場人物の名に、明確な意図を持った関連性がみられること、また命名の仕方の背景には、和歌的な発想があること、これらのことが以上の検討から明らかになってきた。では、これらのことは『ひめゆり』という作品にのみ見られる特徴なのだろうか。

ここで、『ひめゆり』と同様に異類物とされ、草花を登場人物の名にあてた、『朝貞のつゆ』¹⁰⁾という作品をみていきたい。

『朝貞のつゆ』では、登場人物の名の由来がストーリーの結末で明かされる。

されば、あさがほのうへ、かゝるはかなき、ちぎりをも、したまふにより、しうしんの、はなまでも、よるはつゆにちぎり、いろよく、さくといへとも、ひかげをまたず、しをれ侍るなり

又、つゆのみや、とし月の¹¹⁾御おもひ、くわゑんになりて、てんにあかり、いまのいなつまのかけ、これなり、かるかゆへに、にんけんのあいたに、はかなき事、あ¹²⁾るをばあさがほのつゆ、いなつまのかけ、こてうのあそひとたとへ侍るなり

これは「朝顔」についた夜「露」のように、夜中にしか出会うことができない「朝顔」の姫と「露の宮」の悲恋を、その名に懸けていたのである。松本氏は『朝貞のつゆ』について次のように論じている。¹³⁾

第一に、本作は登場人物に主として草木の名を借りてきているが、いわゆる異類物あるいは擬人物とも異なり、これらの人物が死後にそれぞれの草木と現ずるという形式である。これは本地物から示唆をうけたのである。(中略)

以上によって、この作品は先行の物語の単なる模倣ではなく、

御伽草子の中では珍しく作者の個性を感じさせる創作であることがわかるであろう。おそらく、相当の素養をもった文人の筆すさびに成った作品であろうと想像される。

確かに『朝貞のつゆ』という作品には松本氏の指摘する通り、相当な文人の素養を感じる。登場人物の名づけ方をはじめ、「文人」の創作力によって作品の性格を決定づけていることは間違いないだろう。

『朝貞のつゆ』における松本氏の指摘は、そのまま『ひめゆり』にもあてはまる部分が多い。特に『ひめゆり』の登場人物の命名法における和歌的発想は、『朝貞のつゆ』の作者像と、多くの部分で共通する、高い「文人の素養」を見いだせるのではないだろうか。

三、作中に登場する和歌

そこで次に作中にみられる和歌をとりあげたい。中京本を中心に、他の二本の該当箇所を比較してみると、和歌の数は中京本が六首、慶應本が十二首、赤木本が九首とその数が異なる。

中京本

◎くさまくら、かりそめふしの、あた人を、おもひわする、
ときのまそなき

◎くもた、こよひの月も、うらめしや、ともになかむる、人
しなければ

◎山ふかく、おもひいりなは、ありあけの、いつの世にかは、
めぐりあふへき

◎かきつくる、ことのはのみの、かなしきは、みてもあはれと、
人おもはめや

◎おなし世に、すめはたのみも、ある物を、しはしやすらへ、

山のはの月

◎すて、ゆく、うき身のしはし、やすらふは、人のこゝろや、
せきとなりぬる

慶應本

◎草枕、かりそめふしの、あた人を、思ひわする、露のまも
なし

・なかむるに、物思ふことの、なくさむは、月はうき世のほか
よりや行く

◎くもれた、こよひは月も、うらめしや、ともになかめし、
人しなけれは

◎山ふかく、思ひ入なは、ありあけの、こんよにやまた、めく
りあふへき

◎かきつくる、言の葉のみの、よしそなき、見てもあはれと、
人は思はし

◎おなし世に、住はたのみの、ある物を、しはしやすらへ山の
はの月

◎捨て行、うき身のしはし、やすらふは、人のなさけそ、せき
と成ぬる

・なにことを、何とかななく、世中の、たゝあさかほの、花の
上の露

・世中は、とてもかくても、ありぬへし、みやもはらやもはて

しなけれは

・いつの日の、いつの時こそ、かはる共、いつには誰も、残る
へきよか

・あるはなく、なきはかすそふ、世中に、あはれいつれの日ま
てなけかん

・何をして、身のいたつらに、老ぬらん、年の思はむ、ことも
はつかし

赤木本

◎草まくら、かりそめふしの、あた人を、思ひわする、とき
のまぞなき

・まどろまは、夢にあふ夜も、有へきに、うるさや松の、こか
らしのをと

◎くもれた、こよひの月も、うらめしや、ともになかむる、
人しなけれは

◎山ふかく、思ひいりなは、ありあけの、いつの世にかはめく
りあふへき

◎かきつくる、ことのはのみの、よしなきは、みてもあはれと、
人は思はし

◎おなし世に、すめはのそみも、有物を、しはしやすらへ山の
はの月

◎すて、行、うき身のしはし、やすらふは、人の情そ、せきと
成ぬる

・見せはやと、かきあつめたる、もしほ草、思ひをすまのうら
みなれ共

・これをみは、もしも思ひや、いつるかと、書なかしたるみつ
くきのあと

和歌に関する中京本の特徴は、右図に◎で示した歌である。中京本において、作中で詠まれる和歌六首すべてが、他の二本と共通歌になっているのがわかる。つまり慶應本と赤木本に共通する和歌六首が、中京本の六首の和歌なのである。これは何を意味するのだろうか。一つに成立に関わる問題がある。中京本から他本が生じたか、または他本から意図的に中京本が選択したと考えるかによって、中京本の位置づけが大きく異なってくる。しかし、この部分だけで結論を出すことは当然できない。

では、この諸本間における和歌の違いから何を読みとることができのだろうか。そこで、作中において慶應本の「なかむるに」の歌と、赤木本の「まどろまは」の歌がどのように詠まれたかをみていきたい。まず、「なかむるに」の歌である。

むかし、ひかるけんしの、夕かほのうへに、おくれて、よもす
から、月にうそふひて、かくなむ、

と、ひめゆりたちを源氏物語に登場する光源氏と夕顔に見たてて、詠んでいる。それに対して、赤木本は、

ふるきことはを、ゑいし、あかしかねつゝ、月のかほのみ、ま
ほりて、いとゝ、ものうく、おほしければ、

として、故事の引用として詠んでいるにとどまる。両本とも内容の上での矛盾はないが、慶應本の出典を明記している点には注意したい。

同様の違いは、主人公ひめゆりの人物設定にもみることができ。

それは作品冒頭に描かれる。但し中京本は下巻しかないもので、ここでは比較することはできない。そこで他の二本をみることにする。まず慶應本であるが、

あふひのうへの御こ夕きりの、まかきの御所に、すみ給ふ、ひ
めゆりとて、おはしけり、

として、源氏物語の登場人物と重ねあわせながら、ひめゆりという人物を描きはじめる。対して赤木本では、

あふひのうへの、御子に、ひめゆりとて、おはしける

として、慶應本との異同をみることができ。先の和歌と同様、ここでも源氏物語の引用の違いが明らかになっている。これらの点に関して、徳田氏の次のような指摘がある。¹²⁾

「姫百合」の写本と松会版の差異は別箇所にもあるのだが、この源氏物語関係の記事の有無が、お伽草子における源氏物語享受の様相を象徴する。つまり、松会本は源氏物語の記事を意図的にか切り落としたのであるが、また同時にそれが存在しなくても、すでに少将が姫百合に心動かされる姿は伊勢物語関係の記事によって十分に表現し得ており、物語の後の展開も確立している。つまり、先例は一つあればこと足りたのであり、源氏物語を欠いたところで物語のテーマに影響することはなかった。もちろんのこと、仮に伊勢物語関係の記事を置かなかった場合、源氏物語がそれに替わったかもしれないが、〈公家小説〉の恋愛物語における源氏物語引用は不可欠なものであったわけではない。

右にある松会版とは赤木本を指す。源氏物語の引用がなくても物

語のテーマ、「少将が姫百合に心動かされる姿」には影響がないと結論づける。徳田氏のこの指摘はとても興味深いものである。

四、結びとモチーフ

諸本の違いとして、最後にとりあげるのは各本の結びにあたる部分である。結びを検討することは、作品のモチーフを探る上で重要な部分であることは言うまでもない。まず慶應本からみていくことにする。

かやうに、かきつくる事、おかしき事、なれとも、人見よとも、かきおかす、なからむ跡の、かたみにも、なんといへる、ふること、けにもと、ふてのついでに、かきつけ侍り、へ中略おかしく、かたはらいたけれども、なからむには、これを御覧せん人の、あはれにおほし、一ひねりのかう、一ふさの花をも、たむけ給ふ事もやと、かきつけ侍り

「あはれ」とは男女の仲に対して、情趣を込めて向けられた言葉である。つまり、慶應本はひめゆりと少将を通じて、世の男女仲に対する「あはれ」を描いていることが、この結びから読みとることができる。次に赤木本はどうだろうか。赤木本は、二首の和歌をもつて作品を結ぶ。

かやうに、かきつくる事も、すへて、おかしき事なれ共、是を見給はん人は、筆のぬしを、しらせ給はす共、もしやおほしいつるとて、思ひつゝけて

見せはやと、かきあつめたる、もしほ草、思ひをすまのうらみ

なれ共

これをみは、もしも思ひや、いつるか、書なかしたるみつつきのと

慶應本との違いは明らかである。慶應本と比べ感情的な色彩が薄い。それよりも、中心は「筆のぬしを、しらせ給はす共、もしやおほしいつる」とあるように、作品の作者を暗示することにより、積極的に読者に作者を想起させる意図をもっていることにある。そこには、男女の仲というよりも、作品の描き方から作者を想起させようという謎かけの要素がみえる。

では、中京本はどうであろうか。拙稿により既に指摘したが、先の両本とはまた違うものになっている。

てんしやうのこらく、人間の栄花きはめすといふ日もなし。つくさすといふきよふもなし。ちやうせいてんのゆかには、りくわのあめ、つちくれをやふらす。ふらうもんのまへには、やうりうせいの風えたをならさす。けふをちとせのはしめとし、めてたきためしにあかしくらし給ひける。

これは幸若舞曲「新曲」の、

かくて、憂かりし世の中の時に引替へ、人間の栄華、天上の娯楽、極めずと云日もなく、尽さずといふ御遊もなし。長生殿の内には、梨花の雨、土塊を破らず。不老門の前には、楊柳の風、枝を鳴らさず。今日を千年の始めと、めでたき例に、明かし暮させ給ひけり。

と、共通性をみることができよう。なお、『太平記』巻第十八「一宮御息所事」(神宮徴古館本)にも同様の文をみることができ

が、右にあげた幸若舞曲の方が中京本との関係として近いとみてよいのではないだろうか。中京本の結びの一文からは、幸若舞曲の特徴とも近い、祝言性、つまりひめゆりと少将が最後には結ばれるという内容を、「めてたきためし」として言祝いでいるのである。

ここでは、諸本それぞれの結び方から、各本のモチーフを探ってみた。その結果、三本とも全く異なった性格を認めることができたのである。慶應本は、作品をこえて男女の仲の「あはれ」を、情趣を持って描きたそうという姿勢を。また赤木本では、内容よりも、むしろ描き方、その方法から読者に作者を想起させようとする、謎かけの要素を。中京本は、幸若舞曲や太平記と関係しながら、結ばれた男女の「めてたきためし」を祝言をもって描く、それぞれ三本三様のモチーフが明らかになったのである。

五、『ひめゆり』の方法

これまで中京本の特徴を、慶應本や赤木本との比較をおこなうことによって、その違いからあきらかにしてきた。特に結びにおいては、三本それぞれに明確な違いをみることができたのである。

ここで、確認してきた諸本の違いをまとめ、そこからそれぞれの本の叙述方法を明確にしたい。

まず慶應本であるが、先学の指摘にある通り、源氏物語などの先行作品からの引用、かつそれらの影響をみることが出来る本である。それは、男女の仲の「あはれ」を感情的に描き出そうとして、王朝物語的な叙述の方法をこの本に用いたからではないか。

対して赤木本は、これまで慶應本と比べ本文に誤脱のみられる、質的に劣ったものだと思なされてきた。しかしそれは、慶應本を基準に赤木本を捉えた結果であって、真を得ないものである。

そもそも赤木本は、慶應本とは目指すモチーフが異なるからである。慶應本のように、王朝物語的な描き方をするのではなく、むしろ意図的にその性格を切り捨てることにより、赤木本はその独自性を確保しようとしたのである。つまり、結びに記しているように、作品内部から読者自身が作品の作者を想起させるように積極的に読者に言語的謎かけをしたのである。

そして中京本は、結びにあるように、「めてたきためし」として、ひめゆりと少将の仲を言祝ぐという、祝言性を特徴に認めることができた。この中京本の特徴は、

御伽草子という名称に最もふさわしい奈良絵本という形態は、上述のごとく、近世の幕開けに当る文禄・慶長の頃から現われ、以後江戸時代の前期を通じて、版本と同じく商品として大量に生産されたものである。その対象は、公家、武家、および富裕な町人層の婦女子であったと思われる。従って、奈良絵本を作るに当たっては、江戸時代の中期に大坂の柏原屋清右衛門が刊行した二十三篇の「御伽文庫」の広告に「いにしへよりの草紙物語の類のこらずあつめ、箱入にして女中身を治る便とす」とあるように、通俗的興趣をそそる読物であると共に、女性の教養にも役立つ内容のものが選ばれたのであろう。

とする松本氏の指摘と一致する。中京本の特徴もこの御伽草子の一作品として典型的な性格をもっていることが今回の比較で明らかに

なってきた。

『ひめゆり』という作品は、これまで主に慶應本の特徴をもって解釈や論の中心とされてきた。しかし、以上のように三本それぞれが異なるモチーフを描き、その叙述方法は三本三様であることがわかった。では、なぜこのような多様性が生れてきたのか。

六、やうじゆ

『ひめゆり』という作品は、先にあげた『朝貞のつゆ』などと同様に異類物とされている。徳田氏は御伽草子の異類物について、次のように指摘する。⁽¹⁰⁾

異類物は、登場人物が異類というだけで、扱われる内容は人間の場合と同じく多種多様であり、異類という架空の視点をとることによって創作の自由さを獲得すること、あるいは読者への親しみ易さをもたらすなどの効果が考えられる。

まさに『ひめゆり』の多様性も、異類物という方法を用いたことにより生じたものだと言える。

これまで、『ひめゆり』という作品の叙述方法については、管見の限り、十分に検討されてきたとは言いがたい。今回の検討をもとに、異類物のもつ多様性について、より明らかにしていきたい。

追記

本稿は、二〇〇七年七月一日(日)に中京大学でおこなわれた、日本文学協会第二七回研究発表大会・中世部門において口頭発表させていただいたものを文章化したものである。発表当日、台風にも関わらず、先生方をはじめ、多くの方に拙い発表を聞いていただいた。さらに貴重なご助言をいただいた。あわせて感謝申し上げます。

註

- (1) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』一一(角川書店 一九八三年)所収、「姫百合(仮題)」三三六に拠る。
- (2) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』一一(角川書店 一九八三年)所収、「ひめゆり」三三七に拠る。
- (3) 江濱有美「中世小説『ひめゆり』の研究」(『古典文学研究』(長崎大学)第八号 二〇〇〇年)
- (4) 平田善信 身崎壽著『和歌植物表現辞典』(東京堂出版 一九九四年)
- (5) 『万葉集』巻第八(一五〇〇)。
- (6) 『徒然草』第三百三十九段に「秋の草は、萩、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、吾亦香、刈萱、竜胆、菊、黄菊も。蔦、葛、朝顔、いづれもいと高からず、さゝやかなる、垣に茂からぬ、よし。」とあり、兼好は「秋の草」の中に萩・薄・黄菊の名をあげている。
- (7) 『源氏物語』巻二「桐壺」より。
- (8) 『拾遺集』巻第三、秋(二三九)。
- (9) 御伽草子の異類物における擬人化された「菊」については、黒田佳世氏が「菊の名前」(『説話』第一〇号 二〇〇〇年二月)で論じている。『ひめゆり』の少将の名を考える上で、今後参考にさせていただきたい。
- (10) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』一一(角川書店 一九八三年)所収、「朝貞のつゆ」一八に拠る。

- (11) 松本隆信「奈良絵本と御伽草子」『日本文学』一九七七年二月
- (12) 徳田和夫「お伽草子と源氏物語 今後の対照研究に向けての序説」(今井卓爾ほか編『源氏物語の本文と受容』源氏物語講座第八巻 勉誠社 一九九二年)
- (13) 麻原美子・北原保雄校注『舞の本』新日本古典文学大系五九(岩波書店 一九九四年)に拠る。
- (14) 注(11)と同じ。
- (15) 徳田和夫編『お伽草子事典』(東京堂出版 二〇〇二年)より「異類物」の項。

(文学部非常勤講師)

訂正
『中京国文学』第二十六号「中京大学図書館蔵『ひめゆり 下』略解題・翻刻」(平成二〇年三月)の拙稿において、多くの訂正箇所がありました。お詫び申し上げますと共に、訂正一覧を付させて頂きます。

P 88・上・6行目 誤 もうされければ、 / 正 申されければ、
P 88・上・7行目 誤 よろこびたまひつゝ / 正 よろこびたまひつゝ
P 88・上・8行目 誤 申しける / 正 申ける
P 88・上・10行目 誤 いたいのせ / 正 いたきのせ
P 88・下・20行目 誤 いたいのせ / 正 いたきのせ
誤 ・いとふへき、うき世のほかは、すてはてつ、いまはまことの、みちをいのらむ
/ 正 ・何をして、身のいたつらに、老ぬらん、年の思はむ、こともはつかし
P 88・下・23行目 誤 ◎くさまくら、 / 正 ◎草まくら、
P 91・上・20行目 誤 (4)一九九六年 / 正 一九九四年
P 92・下・8行目 誤 ゆらくと / 正 ゆらくと
P 92・下・16行目 誤 なきひとならねは / 正 なき人ならねは
P 94・上・4行目 誤 へにをつけても / 正 へにをつけての
P 94・上・18行目 誤 さまく申ければ、 / さまく申ければ、
P 94・下・23行目 誤 つふくと、 / 正 つふくと、
P 95・下・17行目 誤 ことこそ、 / 正 ほとにこそ
P 95・下・24行目 誤 よなく / 正 よなく
P 96・上・2行目 誤 かかる / 正 かかる
P 96・上・17行目 誤 心、 / 正 心
P 96・上・19行目 誤 かまへてく / 正 かまへてく
P 96・下・5行目 誤 うは、たき / 正 うはたき
P 96・下・10行目 誤 いやく / 正 いやく